

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	北田 克己	第105回再興院展に「前夜」を出品。学内芸術資料館と名都美術館で退任記念展を開催した。特に名都美術館では自選作品25点を全国美術館等から借り出し展示した。科研費研究活動はコロナの制約を受けたがこれまでの伝統絵画材料研究と当該領域国際ネットワークの成果レポート、アーカイブ作業を進めた。
日本画	教授	岡田 眞治	本年度も多くの会議に出席し、多忙を極めた。長久手・長篠合戦図屏風では長久手市の関心も高く、注目を集めることができた。
日本画	教授	井手 康人	目標はどの項目においても充実した内容を行い達成できたと考える。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通じ、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。第75回春の院展に置いて奨励賞・外務大臣賞・前田青邨顕彰中村奨学会「中村賞」を受賞、再興第105回院展においては大観賞を受賞する事が叶い、研究の成果が上がっている。今回の受賞を今後の制作にも活かせるよう研究を重ねたいと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	コロナ禍の中、リモートから始まった学生指導には不十分な点が否めず、対面授業が再開された以降に実はより細やかな対応が必要であったことを痛感している。自身の制作活動では個展が幸いにも実施できたが、制作の充実度をより深めるべき研鑽に努めたい。古典絵画研究では書籍出版やNHK番組出演、論文の投稿など、令和2年度では外部に発信する機会に恵まれたが、コロナ禍で研究の進捗は停滞した。また文化財関係では、県大との共催による「災害と文化財」シンポジウムの開催が実現し、県大と陶磁美術館や近隣諸館とのネットワークも拡充されたように思う。
油画	教授	設楽 知昭	退任記念展（サテライト・ギャラリー）、『絵の幸福』出版記念展（不忍画廊/東京日本橋）の個展を無事おこなうことができた。
油画	教授	阿野 義久	昨年度から一つの高校を拠点として出張授業を行っている。年に一回のことではあるが先方に様々な根回しをお頂き、授業終了後に関連している高等学校や中学校の先生方と懇話会の機会を作っていただいた。とても有意義な時間であり、大学からの広報発信の重要性もさることながら、直接、人に会って話を聞くことの必要性を実感した。この輪がもっと広がるように努めていきたい。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、学部長・研究科長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より一層深くかわり、助力できたと考えている。特にコロナ対策に関しては、換気環境の確保や教育・研究環境の維持に尽力できた。また、国際交流に関しても自己の教育・研究をより深める成果があったと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	研究活動～新型コロナの影響から研究発表の延期があったが研究は深めることができた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・教育活動～新型コロナの影響から対面授業がリモートに代わる時期があったが、ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施、学生の自主性、思考力、実践力を育めた。・大学運営～業務（委員会）が大幅に増加し研究活動に支障があった。研究とのバランスに注意したい。・社会貢献～「GROUND」ホームページの改善等。
油画	教授	井出 創太郎	教員展における廃銅版による作品発表、及び2013年から継続研究する「版と言葉」の研究成果を発表する機会を得ることができ、研究成果の発表という点では充実した年度となった。教育活動においては、修士特別研究の授業内容として予定していた「落石計画」（根室）及び女木島でのプロジェクトを新型コロナの影響を鑑みて中止とした。代替の措置をおこなったが、充実した授業とは自己評価できないため、来年度における「修士特別研究」の授業内容について再考が必要であると痛感している。
油画	准教授	高橋 信行	コロナ禍のため積極的な社会活動などは難しいところがあったが、サンフランシスコでの個展など研究面では成果があった。

油画	准教授	白河 宗利	創作研究の発表においては、個展（京都／日本・ソウル／韓国）、アートフェア（福岡／日本・高雄／台湾）を予定していたがコロナウイルス感染予防のため中止になり、グループ展での発表（ソウル／韓国・銀座／日本など）となった。 専門である絵画の技法材料研究においては、新たな知見や成果が上がった。その一方で、理論研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	岩間 賢	研究活動①は、2020年に開催予定であったが次年度に延期となった。研究活動②は、これまでの成果が認められ、市原市の地方創生事業としての位置付けされた。研究活動③は、文化庁の拠点形成事業として採択を受けるなどCOVID-19の中でも一定の評価を得た。研究活動④は東京オリンピック・パラリンピックのリーディング芸術文化プログラムとして、東京都美術館での展示が中止になるなど成果公表に影響が出た。教育活動ではオンラインによる授業やゼミなど新しい取り組みを開始し、受講学生の研究成果をアーカイブ化できる仕組みを構築した。大学運営では、芸術資料館運営委員として主に卒業・修了制作展の展覧会運営に関わった。社会貢献では、岐阜県白川町、千葉県市原市、茨城県取手市のAIR審査員をした。他、オンラインによるレクチャーなども行なった。
油画	准教授	大崎 宣之	研究活動として個展1件、グループ展2件（国内2/海外1）、プロジェクト1件や展覧会の企画実施、芸術講座などのイベントをおこなう。コロナ禍の状況で、中止となった展覧会や交流事業などもあったが、社会状況を鑑みて十分な研究をおこなったといえる。大学運営としてwebオープンキャンパスへの関わりや芸術講座の企画、また社会貢献活動としての名古屋市文化振興事業団事業運営委員など充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	学生委員、FD委員では学生のより良い大学生活を考え、適宜発言し運営参加できてきたと感じている。専攻運営に関しては、専攻会議などで発言を積極的に言い授業や専攻運営に関わったように思う。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	本年度は、コロナという事態の下で、慣れない教務委員の仕事に追われた一年でした。研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、これ以上のことはできなかったと思います。年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	コロナ禍のために多くの研究発表の機会が中止・延期になってしまったが、その中でも感染対策を徹底して行えた対面授業は有意義なものとなった。
彫刻	教授	神田 每実	自己採点総評：まず教育活動に関しては、コロナ禍による年度当初の計画への様々な影響の存在は否めないが、対応が難しくなった大きな要因として、各地域、各組織等によって個別に定められた規制のバッティングが上げられる。特にフィールドワークを中心とした活動は、活動開始以前の移動・滞在手段に関する制約が生じる為に、特に大きな痛手を被ることとなった。収蔵庫内での資料調査等はその典型である。一方、年度後半から年度末にかけては、未だ予断は許さないとしても、感染制御、WITHコロナの基本が一定の確実性をもって定着してきたこともあり、授業等においても展開に幅を与えることが可能となったように思われる。2021年度においては、これまでの活動内容を悪戯に変更するのではなく、例えば、個々の指向性を探るために効果的であったと考えている遠隔による授業の取り組みを効果的に取り込む等においてこれを補完し、前進させたい。大学運営に関しては、コロナ禍への対応が第一義となったこともあり、特に評価に値する目立ったものはないと思われる。研究活動・社会貢献に関しては、長年の幾つかの取り組みが、多少の成果を示しだしてきたように感じられる。陶磁専攻佐藤文子准教授と取り組む（株）中部リサイクルとの産学共同研究、愛知県障害福祉課・愛知県陶磁美術館・本学プロジェクト研究1同8の官学共同による“あいちアールブリュットサテライト展”での「素材（マテリアル）の発見」の展示企画、飛騨市宮川町種蔵地区での「学びの里種蔵」に向けての企画の実現が、本年度における具体的な成果であろうと思われるが、コロナ禍への対応に窮し実現に及ばなかった取り組みもあり、次年度に向けて実効性のある対応を考えなければならない。
彫刻	教授	中谷 聡	「新作協会の彫刻部小品展」(東京銀座・ギャラリーせいほう)をはじめ、「花とみどり・いのちと心展」(立川・国営昭和記念公園)、「美濃茶盅展」(美濃陶芸協会)などに出品し、研鑽を深めると共に、社会における生涯学習の一環としての芸術文化の発展に寄与することができた。変革期を迎えている大学運営においても情報収集と共に情報発信に積極的に努め、各種委員会業務の遂行と学生の教育活動の充実を図ることができた。

彫刻	教授	高橋 伸行	オンラインでの授業では、学生個々の独自性と創造性が発揮される場面があり可能性を感じた。そうした変化に押し出され、もともとフィジカルな命題を携える彫刻という分野を今後どのように捉え、どのような制作研究の方向性があるのかを探るきっかけとなった。また、通常の講演とは異なるライブストリーミングやインスタグラムプロジェクトに参加する機会を得て、変動の大きさを肌で感じた。これまで継続的に取り組んできた医療福祉現場でのプロジェクト運営は感染拡大の直撃を受け、停滞を余儀なくされているが、それを乗り越えていくしなやかな発想と体制を整え、日々の教育研究に活かしていきたい。
彫刻	准教授	竹内 孝和	コロナウイルス感性症の拡大で東京の展覧会は2021に変更となった。また、本学の卒業生で陶を素材とする作家の展覧会をサテライトギャラリーで企画・展示を行った。韓国で開催されたKSCS International Invitation Exhibitionで優秀賞を受賞した。近年、社会貢献は行えていなかったが、サテライトギャラリーにて芸術講座を企画した。
彫刻	准教授	森北 伸	目標に対し、概ね達成出来たと思われる。今年度は、新彫刻棟の基本設計年度であり、将来の彫刻専攻のありかたについて、各関係者との意見交換が活発となった年度になった。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度は、オンラインによる実技授業を一ヶ月間実施し、動画の活用やユニバーサルパスポートを介した課題提出などの新たな方法を取り入れた。特に古美術研究旅行では、これまでにないバスによる日帰り旅行の実施を提案し、無事に実施できたのは大きな成果であった。社会連携事業ではイオンモールとの連携事業を本学で初めて企画し、ゼミ生による課題を応用した製品の制作とその販売を行うことができた。自身の研究成果物としては、韓国での個展の内容を中心に、彫刻制作についての考えをまとめた日英韓の3ヶ国語による本を制作することができた。
芸術学	教授	中 敬夫	コロナ禍の異常事態で、例年とは比較しづらいが、研究活動に関しては比較的順調、教育活動に関しては何とか乗り切ったというのが正直な感想、大学運営に関しては多忙を極めたが無事に務め、社会貢献に関しては例年通り特に言うべきこともない、というのが本年度の総括となる。
芸術学	教授	小西 信之	現代美術批評の重要な書物の翻訳（ロザリンド・クラウス著『アヴァンギャルドのオリジナリティ モダニズムの神話』谷川渥と共訳、2021年3月9日、月曜社）を今年は出版でき、大きな成果を出すことができた。また今年はコロナ禍のなか初めての遠隔授業など授業運営に苦労したが、そのなかでさらに常勤教員が一人休職したことにより、その教員の授業を休校にせず、総合研究や卒業研究など当該教員の担当する学生への指導を希薄にしないよう非常勤の講師を適宜あてがい対応するなど専攻運営に尽力した。次年度は自分が専攻長となるので大学運営、教育、労務管理と合わせて、今後も自らの研究に勤しみたいと思う。
芸術学	准教授	本田 光子	本年度は特に遠隔授業について、学生の負担が通信面でも課題等でも増えすぎないように、かつ興味を持って取り組めるよう工夫を凝らし、良い手応えを得た。研究面では自由な移動が制限される中、できることに真摯に取り組み成果を得た。委員会は特に入試の安全な実施のため、感染症対策を検討している。休職に入った教員のサポートを、教育の質保持および学内業務の面で担った。
デザイン	教授	関口 敦仁	今年度は研究活動では科研事業の最終年でもあり、研究成果としてまとめあげることができ、文化庁のメディアアート推進事業でのアーカイブ事業では企業メセナでのメディアアート展示事業の資料を成果展示することもできた。また2020年度より始まるメディア映像専攻のための準備として、カリキュラムから、建物備品まで計画し、順調に準備することができ、新しい分野を大学として進められる体制をととえた。資料館運営での感染対策なども含め、全体的に忙しい年度であったが、教育研究、大学運営や社会活動など全体的にサポートすることができた年であった。
デザイン	教授	水津 功	コロナによって研究計画の一部に中止や変更があった。デザイン教育の改革はより具体的になった。芸術大学のスタートアップはまだ黎明期であり具体化を進めつつ他教員の一層の理解や賛同が待たれる状況である。施設整備はR3年度が山場となるのでその準備を行った。社会貢献は計画の一部が中止や変更があった。これまで協力関係を保ってきた近隣市への貢献が一層進んだ。
デザイン	教授	柴崎 幸次	各項目を、概ね良好に実施することができた。国際交流に関してはコロナの影響が大きかった。
デザイン	教授	石井 晴雄	コロナで実施できなかったワークショップなどはあったが、概ね、当初の計画が遂行できた。

デザイン	准教授	今尾 泰三	毎年の事であるが、自身としては各項目において可能な限り精一杯努力を重ねていると思っている。目に見えるような、数値化出来るような成果や貢献が出来るかどうかについてはいつも曖昧としている事が多く歯がゆい気持ちは残る。目に見える芳しい成果や貢献は対外的な評価になるのかもしれないが、それがいつ具体的に目に見えるのかわからない。しかしながら諦めず、今後も努力を重ねていく所存である。
デザイン	准教授	森 真弓	今年度は、新型コロナウイルス感染症に対する対応として、新たな教育環境（新カリキュラムの開始、社会連携プログラムの導入、遠隔授業形式への対応、学生とのコミュニケーション方法の工夫など）を整える活動に尽力した。
デザイン	准教授	夏目 知道	R2年度はコロナ禍において、実施が難しい事柄も一部生じたが、研究、教育、大学運営、その他において実施可能なことを工夫して推進することができた。
デザイン	准教授	佐藤 直樹	年度当初に設定した活動計画を遂行し、目標を達成した。なかでも「大学運営」「社会貢献」分野における活動は、困難な社会状況におかれたなかにあっても一定の成果を残すことができたと自負している。
デザイン	准教授	本田 敬	今年度は授業、研究、両面で積極的に産学連携の事業に関ることができた。今後は年度を跨いで商品化や、実施に向けて具体的な活動を継続して行う予定である。今春にはいくつか外部発表も控えているため、製品開発のみならず、広くその価値を伝達していく、プロモーションに関してもディレクションに関わっていく必要を感じている。
デザイン	准教授	春田 登紀雄	本年度は新型コロナ感染症の影響も多大にありましたが、教育・研究・社会連携で充実した成果をあげることができました。その中でも大学運営面で担当している広報活動は、関係協力者と共に、本学初のWEBオープンキャンパスを開催することができました。多くの方にご覧いただきましたこと感謝申し上げます。
デザイン	講師	望月 未来	着任初年度ということで担当授業の運営方法確立に注力した。本年度の経験を踏まえ今後の教育活動に活かしていきたい。
陶磁	教授	友岡 秀秋	産学連携事業とコンペ(CLDA)開催事業に追われている感がある。しかし私の専門であるプロダクトデザインは、社会との関わりのなかで成り立つものなので、やり甲斐を感じている。また学生達にとっても好影響であると確信している。退官後も更にセラミック関連産業の活性化に寄与できる様、努力していきたいと考えています。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、確かな実績と成果を得ることが出来た。
陶磁	教授	長井 千春	コロナ禍の今年度は、積極的な制作発表や研究は十分実施出来なかったが、教育活動に重点を置いて取り組むことができた。博士前期課程1名、学部4年生3名の修了・卒業制作を主指導、博士後期課程の主指導・主担当の学生3名、副担当1名の指導に尽力出来た。また、陶磁専攻2021年度4月始動予定の陶磁専攻の第3専門コース（芸術表現コース）開設のため、新しいカリキュラム、授業内容の検討、施設の準備に取り組んだ。
陶磁	准教授	田上 知之介	教育活動、大学運営、社会貢献においては、概ね目標を達成できました。一方で、研究活動においては新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、十分な研究成果が得られませんでした。今後は、予定していた研究活動の実現に向けて努力していきたいと思います。
陶磁	准教授	佐藤 文子	コロナ禍の中、幾つかの活動は中止されることになったが、令和2年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。特に研究活動においては、障害者福祉支援活動を行うことで、陶芸教育の取り組みと素材への可能性を模索することができ、陶磁器における色彩と原料素材についての研究を行うことができた。 次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。

陶磁	准教授	小枝 真人	研究活動・社会貢献においては積極的に取り組む事が出来、概ね良好な成果を得た。教育活動・大学運営に関しては積極的に取り組む事は出来たが、まだまだ他の先生の助けを得ての運営だったので、次年度にこの経験を活かしていきたい。
教養	教授	清道 正嗣	COVID-19のため研究材料の入手ができず研究には支障が出たが、教育に関しては緊急ではあったができる範囲で対応したことによって学生への影響を最小限に抑えられたと思う。
教養	教授	石垣 享	学会では、出張が無くなり、学会大会も減少したために執筆を行った。本学での体育関係全般の授業展開について忙殺された1年であった。自身の授業のみならず非常勤の授業にも積極的に参加し、体育館の施設および物品の感染予防および事後の消毒と清掃を実施した。人事委員会では、将来において問題となる可能性のある内容について、会議外で時間を割き、調性を行っている（進行中）。